教育実践研究　第25集（2015）　247－252

[総合的な学習の時間]

協同的な学習を機能させるための学校間連携の工夫
－小規模校が複数存在する中学校区での実践を通して－

山口　哲史*・大重　涼平**・布施　博紀***・
今井　　淳****・冨沢　一紀*****

1　研究の意図

「生きる力」の理念の実現のため，平成20年に学習指導要領が改訂され，総合的な学習の時間（以下，総合的な学習）の目標に協同的に取り組む態度が加わった。その理由を文科省（2008）は「他者と協力しながら身近な地域社会の課題の解決に主体的に参画し，その発展のために貢献しようとする態度をはぐくむことが必要とされるからである」[1]とし，そのためには，「お互いに考えや意見を出し合い，見通しや計画を確かめ合い，他者の考えを受け入れながら，問題の解決や探究活動を協同して行う学習経験の積み重ねが大切になる」[1]と述べている。この協同して行う学習（以下協同的な学習）については「多様な情報を活用して協同的に学ぶ」「異なる視点から考え協同的に学ぶ」「力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ」[1]の３つの具体的な姿を想定し，協同的な学習を機能させることにより「多様な考え方をもつ他者と適切にかかわり合ったり，社会に参画したり貢献したりする資質や能力及び態度の育成につながる」「探究的な学習として，児童の学習の質を高めることにつながる」[1]と，その価値を述べている。

しかし小規模校では，そうした協同的な学習が機能しにくい実態がある。藍澤（2010）は，「活動のまとめや話し合いをする場合，人数が少ないため，たくさんの意見が出なかったり話し合いが深まらなかったりする場合が多い」[2]と少人数の課題を挙げている。また，人間関係の固定化から，能力の高い特定の子に考えが流されたり，発表活動への意欲が低下したりする実態も見られる。これらは多くの小規模校で見られる共通課題といっていい。新潟県の山間部においては，こうした小規模校が数多く存在し，当校が設置されている南魚沼市のＳ中学校区も，７校中６校が学年単学級の小規模校である。

こうした課題を解決する一つの手立てとして，小学校間で連携して学習をする方法が考えられる。若月（2008）は，同一中学校区の小学校３校で連携し，インターネットを使った交流学習を行った。その結果「交流の楽しさから，学習に対する意欲が高まった」[3]としている。また，金子（2008）は「縄文」という共通のテーマをもとに，信濃川中流域の複数の小学校で連携して総合的な学習を行った。年間３回の交流学習を実施し，互いに交流し合いながら課題を追究することで「自己の学びの達成感や成就感を高め，自己の生き方への思考を展開させることができた」[4]としている。

これらの実践は小規模校における実践ではないが，学校間で連携して学習を行うことが，協同的な学習を機能させ，意欲の高まりや自己の生き方を考えさせる効果があることがわかる。よって小規模校においても同様に，学校間連携を行うことで協同的な学習を機能させることが可能であると考えられる。

そこで本研究では，同一中学校区内の小規模校の間で連携し，高学年の２年間継続して総合的な学習を行う。南魚沼市では，ほとんどの学校で５年生の総合的な学習では米作りが行われ，６年生でもキャリア教育に関するテーマで学習が行われているため，テーマを共有し連携して学習する条件が整っている。また，同一中学校区内での連携は，学校同士の距離が近いため連携が取りやすい。

よって，同一中学校区における学校間連携は，小規模校における協同的な学習を機能させるために有効であると考える。

2　研究の目的

本研究の目的は，小規模校で協同的な学習を機能させるために，どのような学校間連携が効果的かを明らかにするこ

*　弥彦村立弥彦小学校　　**　南魚沼市立中之島小学校　　***　上越市立国府小学校
****　南魚沼市立第一上田小学校　　*****　南魚沼市立上関小学校

とにある。また，協同的な学習の姿として想定する「多様な情報を活用して協同的に学ぶ」「異なる視点から考え協同的に学ぶ」「力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ」の３つの姿を表出するためには，どのような指導が必要となるのかを検討する。

３　実践の概要

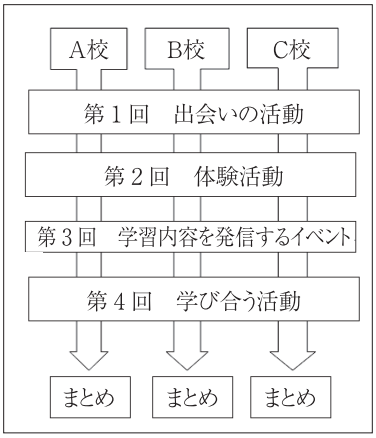
５年生で行った「塩沢お米キッズプロジェクト」と，６年生で行った「南魚沼キッズプロジェクト」の実践を以下に記す。同一の子どもたちが２年間を通して一緒に総合的な学習を行った。

(1)　塩沢お米キッズプロジェクト

①　単元の構想

各学校で，「米」を共通のテーマとして，総合的な学習を行う。ただし，各校が特色のある実践を行うことで，より効果的な交流ができると考えられるため，「お米」というテーマであっても，その切り口は各校に委ねる。

単元の流れをイメージしたものを図１に示す。①最初の出会いの活動，②テーマに関する体験活動，③学習内容を発信するイベント，④学習してきたことをもとに学び合う活動，の４つの共通体験を行う。各学校で総合的な学習を展開しつつ，全４回の共通体験をすることにより，協同的な学習が機能し，学びの深まりや意欲の高まりが予想される。



【図１】単元のイメージ

②　指導の実際

塩沢お米キッズプロジェクトに参加したのはＳ中学校区７校のうち３校であった。人数に違いはあるが全て単学級であり，それぞれ独自の切り口で学習を行っている（表１）。年間の共通体験は表２の通りである。

【表１】参加校の児童数とテーマ，活動の概要

	児童数	テーマ（活動の概要）
D小学校	17名	南魚沼産コシヒカリは日本一!?（日本各地のお米について調べ，南魚沼産コシヒカリと比較する。南魚沼産コシヒカリの現状を知り，自分たちにできることを考える。）
Ｉ小学校	８名	日本のお米があぶない！（食料自給率をあげるためにはどうしたらいいか考え，米粉のレシピや普段の生活の中でできることを実践する。）
N小学校	40名	実感し地域の米作りについて考える。（お金を借りるところからスタートし，田植えや稲刈りだけでなく，水管理や機械のリースなど，農家になりきって米作りをし，その苦労や喜びを実感する。）

【表２】年間の共通体験

	時期	内容
第１回　出会い	７月	①学校混合班の編成と自己紹介，名刺交換　②各校の校舎内・学校田見学
第２回　体験活動	９月	①米の食べ比べ　②ＪＡ塩沢営農指導員からの話（南魚沼産コシヒカリの現状） ③第三回のイベント打ち合わせ・準備
第３回　イベント	11月	①お米の販売活動　②南魚沼産コシヒカリのＰＲ活動　③街頭アンケート
第４回　学び合い	２月	①パネルディスカッション　②ポスターセッション

第４回の学び合いの活動におけるパネルディスカッションについて述べる。塩沢お米キッズプロジェクトのまとめとして，各学校のテーマに即した意見文について，ゲスト（農家・JA）も交えたパネルディスカッションを行った。以下は，D小学校の意見文をもとに「コシヒカリは日本一か」について話し合った内容の一部である。

・ぼくは，24年連続で特Ａをとっている米は他にないから，日本一だと思います。（A男：N小学校）
・でも，食べ比べをしたときに，他にもおいしいお米はたくさんありました。（B子：Ｉ小学校）
・私は，他の県のお米を調べて南魚沼産コシヒカリと比べました。どっちもいいところがあるし，必ずしもナンバーワンではないと思います。あきたこまちは「ミスあきたこまち」などでPRをしているそうです。私たちも「ミス

ターコシヒカリ」のようなPRをすべきだと思います。（C子：D小学校）
・でも，お米販売の時に観光客の人たちにアンケートをとったら，南魚沼のコシヒカリを知っている人がたくさんいて，「やっぱり有名なのだな」とぼくは思いました。（D男：N小学校）
・そうかもしれないけれど，JAの方から「南魚沼産コシヒカリは，質はよいが，高いから売れない」という話を聞きました。有名でも売れなくちゃ意味がないから，もっと安くしたらいいと思います。そしたら，みんなもっと買ってくれると思います。（E男：D小学校）
・売れたとしてもそれじゃ，農家が大変になります。質が悪いのではないから，安くするのには反対です。ブランド力が落ちては意味がないと思います。（F子：N小学校）
・実はそのブランドにあぐらをかいて，楽をしてしまっている農家がいるのも事実です。みなさんの言うように，努力が必要なのかもしれません。（農家：ゲストティーチャー）　（後略）

A男の「24年連続で特Aである」，B子の「食べ比べをして他の県の米もおいしかった」，E男の「JAの方の話」という意見は，全て第２回の体験活動で得た知識である。また，D男のとった「アンケート」も第３回のイベント時に観光客にとったものである。そこに，他県の米を調べているD小学校のC子が「他県のようなPRをすべきだ」という，自分たちの学習から得た考えを話している。また，農家になりきって米作りをしてきたN小学校のF子も，「安易に安売りすることに対して反対だ」と自分たちの学習から得た考えを話している。

そのF子は，第４回の活動後に次のような感想を書いている。

私たちは，借金をして機械を借りるところからスタートしました。田植えだけじゃなく，水の管理なども自分たちでやって，南魚沼産コシヒカリを一生懸命に育ててきました。収穫して食べた時はとてもおいしかったです。だから，クラスでお米の値段を決めるときも，お米を安く売ることには反対でした。でも，今日話し合いをして，食べ比べをしたとき，どれが南魚沼産のコシヒカリかわからないくらいどれもおいしかったのを思い出しました。安くすることには反対だけど，PRをするとか売るための努力はしていかなくちゃいけないなと思いました。（F子：N小学校）

ディスカッションの発言や感想から，同じお米というテーマでも各学校により異なる切り口で学習をしているため，多様な情報が集まっていることが分かる。当然，そこに集まる子どもたちは異なる視点から意見を述べる。また，他校の児童との交流は「考えよう」「関わりたい」という意欲を生み出す。これら３つは，文科省の想定する協同的な学習の姿と一致する。

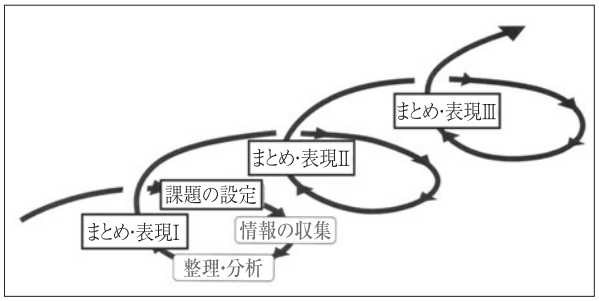
しかし，ただ集まるだけで協同的な学習が機能するわけではない。話し合いの様子からも分かるように，第１回から第３回の中で得た共通体験が異なる学習をしている子どもたちをつなぐ役割を果たし，協同的な学習の３つの姿につながった。そして，各学校独自の学習から得た考えが，学びの質を高めていったのである。

５年生の実践では，第４回の活動で協同的な学習の３つの姿を見ることができたが，それまで子ども同士の考えを交流する機会がなかったため，第１回から第３回においては「力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ」姿は見られたものの，「多様な情報を活用して協同的に学ぶ」「異なる視点から考え協同的に学ぶ」といった姿は見られなかった。各学校が異なる切り口から学習を行っているので，もっと考えの交流を行うことで，より協同的な学びが機能した可能性がある。

⑵　南魚沼キッズプロジェクト

①　単元の構想

６年生では「ふるさと」を共通テーマとして総合的な学習を連携して行った。前年度の反省を生かし，キッズプロジェクトの活動を，各校の探究的な学習の「最初の課題の設定」と「まとめ・表現」の部分に位置づけた（図２）。こうすることで，各校が行っている異なる学習の成果を共有しながら活動が進んでいくことになる。これにより，「力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ」だけでなく，「多様な情報を活用して協同的に学ぶ」や「異なる視点から考え協同的に学ぶ」機会も増え，より協同的な学習が機能すると考えた。



【図２】単元のイメージ

② 指導の実際

6年生では，5年生のときの3校に加え新たに2校が参加することになった。いずれもＳ中学校区の小規模校である（表3）。各学校で切り口の異なる総合の学習を展開しつつ，年4回の共通体験をする。（表4）。

【表3】参加校の児童数とテーマ，活動の概要

	児童数	テーマ（活動の概要）
D小学校	17名	南魚沼市の観光をもりあげよう！（ふるさとである南魚沼市の人口が減っているという課題に対し，南魚沼市のよさを調べ，観光の面から自分たちにできることを考える。）
Ｉ小学校	8名	歌舞伎を守れ（南魚沼に残るこども歌舞伎について学び，その良さを知るとともに，歌舞伎を残していくためにはどうしたらいいのかを考える。）
N小学校	40名	ふるさとを見つめよう（地域の人・自然・ものに触れたり，地域をPRしたりする活動を通して，自分たちのふるさとの良さに気づき，これからの南魚沼市のあり方について考える。）
U小学校	18名	夢が叶う街を考えよう（農業の高齢化，若者人口の減少などの課題のある南魚沼市を，夢が叶う街にするためにはどのような取り組みができるか，自分ならどんな職業に就くかを考える。）
O小学校	11名	越後上布を広めよう（塩沢つむぎや越後上布といった南魚沼市が誇れる伝統芸能について知り，もっと地域の人たちにその良さを伝えるにはどうしたらいいかを考える。）

【表4】年間の共通体験

	時期	内容
第1回　課題の設定	4月	①市役所で南魚沼市の良さや課題を聞く ②学校混合班の編成と自己紹介，感想の交流
第2回　まとめ表現Ⅰ	9月	中間報告会（ポスターセッション）
第3回　まとめ表現Ⅱ	11月	①南魚沼市のPR活動　②街頭アンケート
第4回　まとめ表現Ⅲ	2月	パネルディスカッション

以下に，多様な情報を活用して学ぶ姿について述べる。

第1回では市役所で南魚沼市について話を聞き，感想を学校混合班でkj法を用いて交流した（図3）。子どもたちは，それぞれが感じた「南魚沼市の観光客は多い」「おいしいものがたくさんある」という良さや，「やっぱり第一次産業は減っているのだな」「人口がどんどん減っていて大丈夫かな」といった問題点を発表し合い，たくさんの情報の中から自分が調べていきたい課題を見つけることができた。

【図3】kj法で交流した感想

また，第2回のポスターセッションでは，歌舞伎や塩沢つむぎなどの「伝統文化」，スキー場やコシヒカリPR等の「観光」など，それぞれが追究しているテーマについての情報を交換した。感想を発表し合ったところ，「住んでいる町なのに，知らない良さがたくさんあった」「地域の人たちは，みんな知っているのだろうか」という感想が多数出された。そうして子どもたちは「南魚沼市の良さを地域の人に伝えるにはどうしたらいいか」という新たな課題を見出した。

第3回のPR活動では，地域の人たちが南魚沼市のことをどう思っているか調べるため，来場者に南魚沼についての意識調査も行った。各学校ごとに，自分たちのテーマに即した独自のアンケートを実施した。アンケート結果は集計し，各学校で共有した。以下はその結果を見た子どもたちの感想である。

南魚沼市のものではないものを名物といっている人がいて，やっぱり南魚沼市のことをみんなあまり知らないのだなと思った。それに，歌舞伎を知っている人は全然いなかった。どうやったら広められるのだろう。（G男：Ｉ小学校）
スキーができるから，南魚沼市を好きだという人がいれば，雪が多いから嫌いだという人もいた。雪は南魚沼市の特徴だけど，メリットデメリットがあるのだなと思った。もっと雪を活用する方法はないのだろうか。（H男：N小学校）

南魚沼市に住んでいる理由が，「生まれたから」とか，何となく住んでいる人が多い。どうせなら「好きだから住んでいる」と言ってもらえるような町にしたい。（Ｉ子：Ｕ小学校）

PR活動が終わった直後，子どもたちは「南魚沼の良さをPRできた」と達成感をもっていたが，アンケート結果を見て，「このままだといけない」という思いを強くした。子どもたちの中に「どうしたら南魚沼市をもっとよくできるのか」という課題が生まれ，第４回のパネルディスカッションへとつながっていった。

このように，「最初の課題の設定」「まとめ・表現」の部分にプロジェクトの活動を位置づけたことで，第１回から第３回まで多様な情報を活用して協同的に学ぶことができるようになった。その協同的な学習によって課題が明確になり，探究活動を持続させ繰り返させることができた。

次に，南魚沼キッズプロジェクトの１年間の活動が，どのような効果があったのかを考察する。以下は抽出児童（M子：Ｄ小学校）が，それぞれのプロジェクト後に書いた感想の一部である。

第１回	市役所の方の話を聞いて，南魚沼市にはいろいろなよさがあることが分かりました。それから，南魚沼市の人口が平成44年には，とても少なくなることにおどろきました。
第２回	私たちは，市役所の方が言っていた名物のお酒についてまとめました。他の学校の発表を聞いたら，「かぶき」とか「観光スポット」とかをくわしく調べていました。南魚沼市のいろいろな良さがくわしく分かりました。
第３回	「南魚沼市に住みたい」と言う若い人は37％しかいませんでした。４月に市役所の人から人口が減るという話を聞いたけど，本当でした。このままだと若い人がいなくなってしまうので，何とかしたいです。
第４回	私だったら，若い人がいなくなる課題を解決するために，家族で自然にふれあいながら学べる「自然パーク」を作ります。また，雪を夏まで保存する建物をつくって，１階をかまくらやすべり台などの遊び場，２階を勉強スペースにします。これで，雪が多いというデメリットをメリットに変えることもできます。

第１回に市役所で聞いた「南魚沼市の良さ」について，M子が興味をもったのはお酒であった。しかし，他校では異なる良さに興味をもって調べている子どもがたくさんいた。第２回のポスターセッションでM子はたくさんの情報にふれ，「多様な情報をもとに協同的に学ぶ」ことができ，第１回よりも南魚沼市の良さについてより「くわしく知ること」ができた。

第３回では，地域住民にアンケートをとり直接生の声を聞くことで，地域の課題をより現実味のあるものとして受け入れられた。さらに第４回では，第３回で他校が調べたアンケート結果をもとに，M子は「雪のメリット・デメリット」をふまえた考えをもつことができている。これは，「異なる視点から協同的に学ぶ」姿である。

第１回のときに人口減について聞いたとき，M子はただ「おどろいた」で終わっており，そこには南魚沼市への思いは感じられなかった。しかし，第３回では「何とかしたい」という言葉に変わっている。M子は，第２回で南魚沼市の良さがたくさんあることを理解し，第３回で南魚沼の良さをPRした。自分のふるさとである南魚沼市について知り，行動したことにより，少しずつふるさとへの思いが高まっていったのである。そして，地域住民の生の声を聞き，自分なりに南魚沼市をよくするにはどうしたらいいかを考えるに至った。それは，社会に参画したり貢献したりしようとする態度であると言える。こうした姿が見られたのは，キッズプロジェクトの活動を各学校の探究的な学習の中に位置づけ，課題解決を積み重ねた成果である。

4　成果と課題

(1)　成果

５年生における実践で，小学校間で共通体験をしながら交流することにより，「力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ」ことができ，協同的な学習が機能することが明らかになった。また，６年生における実践では，各学校の探究的な学習の「最初の課題の設定」と「まとめ・表現」の部分に活動を位置づけることで，「多様な情報を活用して協同的に学ぶ」「異なる視点から考え協同的に学ぶ」機会が増え，より協同的な学習が機能することが明らかになった。

キッズプロジェクトの２年間が，子どもたちにどのような変化を与えたのかを考察する。以下はN子（Ｉ小学校）の２年間の感想を抜粋したものである。

お米キッズ 第１回	Ｎ小学校の人とＤ小学校が来て，私たちは学校を案内しながら学校紹介をしました。私は，はずかしくて何も言えませんでした。Ｏ男さんがしっかり発表していたのですごいなーと思いました。
お米キッズ 第４回	私はグループ内で，めあてを言うことをがんばりました。わたしは，いっぱいの人の前で発表するのは苦手です。だから，グループ内での発表もすごくはずかしかったです。でも発表しないと６年生や中学生になってもはずかしいままの自分になっちゃうから発表しました。今日は発表できる５年生でした。
南魚キッズ 第４回	最初は勇気が全くありませんでした。でも，Ｄ小学校の話を聞いていて，自分の意見が言いたくなって。自信はなかったけど勇気をもって手を挙げてみました。当たらなかったけれど，恥ずかしがりながらも手を挙げられてよかったです。私はこれまで言えるはずなのに「手を挙げていない人もいるからいいや」と思って手を挙げられませんでした。でも，今日のキッズフォーラムのおかげで「手を挙げてみよう」という心に変わって，大勢の人がいる中でも手を挙げることができるようになりました。でも，だからって気を抜かないで，キッズフォーラムは終わったけど，これからの授業でも手を挙げることを目標にして毎日がんばっていきたいです。日々の練習を積み重ねていけばきっと中学校では新しい自分になっていると思います。

Ｎ子は５年生の最初の活動ではほとんど話すことができなかった。それが１年間の活動を経て，少人数のグループ内なら発表することができるようになった。そして，２年目の最後の活動では，観客やゲストも含め100名を超える人々の前で手を挙げる勇気をもつまでになった。それはＮ子にとって他者と関わり社会に参画しようとする態度だと言える。また，中学生という少し先の未来に向けてではあるが，自分の生き方を考えることもできた。それは，２年間のキッズプロジェクトで培った関係が，中学校進学後にもつながっていくことを意識しているからであると考えられる。

２年間を通してＮ子は，他校の友だちと考えや意見を出し合い，他者の考えを受け入れながら，問題の解決や探究活動を協同して行う学習経験を積み重ねてきた。前述のような姿が見られたことから，小規模校においても学校間で連携し指導することによって，協同的な学習を機能させることが可能になると言える。

⑵　課題

７校の小規模校が１校に集まるＳ中学校区では，中１ギャップ解消が一つの課題である。前述したＮ子の姿や親善大会等で仲良く交流し合う子どもたちの様子から，キッズプロジェクトの活動が中１ギャップ解消にも効果があったことが予想される。しかし，本研究ではこれらを検証するまでには至らなかった。小規模校による学校間連携が中１ギャップの解消に効果を発揮しているかどうかは，今後の研究で明らかにしていきたい。

平成26年度のキッズプロジェクトは５年生が４校，６年生が５校参加し実践を行っている。今後，本プロジェクトが継続して実践されることにより，複数の小規模校からなる中学校区の総合的な学習の在り方についてさらに研究を深めていく。

引用文献

１）文部科学省『小学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編』2008

２）藍澤　晋　『小規模校の長所を生かした総合的な学習』　教育実践研究第20集，2010，P271-P276

３）若月隆雄　『ネットワークを活用した学校間交流学習の効果－Weblogを活用した町内三小学校における実践を通して－』　教育実践研究第18集，2008，P247-P252

４）金子和宏　『子どもの学びを核とする博学連携組織の開発とコーディネーターの役割－信濃川火焔街道博学連携プロジェクトの５年間－』　教育実践研究第18集，2008，P235-P240